

中国

平林 宣和

中国大陸の舞踊は、特に近現代における特殊な歴史的、文化的環境から、日本や欧米とは全く異なる独特の展開を遂げてきた。今回は、近現代中国舞踊の変転の様を理解する一助として、以下の書籍を紹介したいと思う。

『中国現当代舞劇発展史』于平／著、人民音楽出版社、2004年、北京、374頁

本書が記述の対象とする中国の「舞劇」とは、「舞踊を主な表現手段とする劇的構成を持った舞台芸術」のことである。中国の「歌劇」がそのままオペラと訳せないのと同様、正確に対応する訳語の見出せない中国独自のジャンルであるため、ここではそのまま舞劇と呼ぶことにする。



中国の舞踊史は通常紀元前から記述が始まるが、舞劇は20世紀に生まれた新興ジャンルであり、その意味では舞踊史の中の特異な一隅に過ぎないともいえる。しかし『白毛女』、『紅色娘子軍』など、日本でもある程度知られた一連の作品は、この舞劇の流れから生まれてきたものであり、20世紀の中国舞踊、および舞台芸術全般の動向を知る上で、見落とすことのできない領域であるといっただろう。

本書はタイトルに「現当代」舞劇史とあるように、現代（1919年～1948年）および当代（1949年～現在）における舞劇の歴史を記述したものだが、先に述べたごとく舞劇自体が20世紀の産物であるゆえ、おおよそ舞劇全史と呼ぶ内容を備えている。中国舞踊史に関する書籍はこれまで数多く出版されているが、一方舞劇を専門に扱ったものは稀であるため、今回はその内容を少し詳しく紹介したいと思う。

中国の現当代をさらに細かく区分すると、新中国建国前の「民国期」、建国から文化大革命勃発までの「十七年」、そして十年間にわたる「文革期」を経て、現在に至る「新時期」と、計四つの時代に分けられる。

全十二章で構成される本書は、民国期の状況を語る第一章に始まり、第五章までのほぼ百頁で、文革終結に至るおよそ五十年あまりの歴史を素描している。一方、残りの二百数十頁は新時期における舞劇の多様な展開の記述に当てられており、この点からすると、本書の重点は新時期以降に置かれているといっただろう。

とはいえ、20世紀の舞劇史に通底する様々な系脈は、民国期に胚胎し、十七年期には明確にその姿を現していた。本書はこのことを前提に各時代の主要作品をほぼ時系列に並べながら、今日に至る舞劇の複数の流れを綿密に描き出している。

舞劇史を貫通する最も主要な流れは、「民族様式」を巡る一連の試みであった。新中国建国後の舞劇の展開は、ソ連からの大々的なバレエ移入と並行して、いかに舞劇を「民族化」するか、という課題をそのスタートラインとしている。本書の第三章は、舞劇の創作が最初のピークを迎えた建国初期の代表作、『宝蓮灯』にまずスポットを当てている。

『宝蓮灯』は、ソ連から派遣されたバレエ講師、および著名な京劇俳優李少春に指導を受け、彼我双方のテクニックを身につけた北京舞踊学院の学生が、「民族的」な新しい舞劇の構築を目指して作り上げた卒業作品であった。バレエを身体技法の基軸として受け入れつつ、さらに伝統的な所作をもう一方の土台として独自の「民族様式」を打ち立てるという実験は、以後様々な要素を取り込みながら繰り返されていく。

そしてこの流れは文革後の新時期の幕開けとともに、一気に花開くことになる。本書の第六、七章は、中国の舞踊の歴史的、文化的多様性を背景に、壁画を元に復元された敦煌様式、漢唐様式といった新たな古典スタイルの創造から、地方の伝統演劇、少数民族の芸能、さらに日本や朝鮮半島の舞踊をリソースにした新様式の模索まで、様々な「民族様式」構築の試みを跡付けている。

一方この系脈と並行して建国後の舞劇の流れを方向付けていたのが、「革命様式」であった。第二章の「戦士舞劇」、および第三章の『小刀会』など建国初期の作品から、第四、五章で記述される『白毛女』、『紅色娘子軍』を頂点とする文革期の革命模範劇に至るまで、革命英雄の表象の構築を目指す革命様式は、中国舞劇のスタイルを強く既定してきた。この流れは文革終結後も国家の文

化政策を背景に持続しており、第十二章では新時期における革命様式の新たな展開が略述されている。

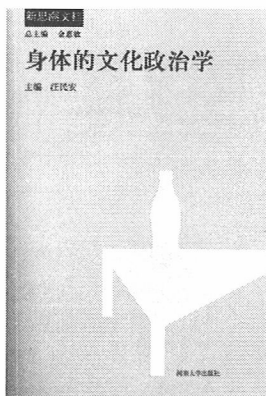
また文革期はスタニスラフスキーシステムが全面的に否定されたように、舞台芸術から「人間・個人・心理」が徹底的に排除された時代であった。そこからの強力な揺戻しとして起こった舞劇における「心理」探求の動きも、中国固有の歴史的現象として、主に第八、九、十章において詳述されている。またこの現象に随伴する形で、20世紀前半のソ連、およびその後のバランシンの試みに触発された、様式や劇的展開よりも舞踊の音楽的構成を重視する交響舞劇というジャンルが出現し、同時期の舞劇に固有の色彩を与えたことにも一定の言及がある。

以上のような20世紀中国舞劇の主要な流れのほか、本書は舞踊教育にも相応の関心を寄せている。建国初期に体系化された『中国古典舞教学法』、これを発展させる形で1980年代に作り出されたレッスン「身韻」、さらに十一章では現時の高等教育機関における教学を取り上げ、創作の場と相互に連関しつつ時代ごとに姿を変えていった舞踊教育の状況を概観している。

序章で著者の于平氏が述べているように、本書は「過去の事実新たな意義と価値を付与し、現代の人々の活動に資する」ために書かれたものである。そのためか本文の筆致に冷徹な距離感を持った歴史的視線はほとんど感じられない。一方、評論活動を通して新時期の舞劇に親しく接してきた著者の、先人あるいは同時代人の歩みを今後の糧として整理、記録しておきたい、という意志は伝わってくる。「民族」であれ「革命」であれ、身体を素材に新たな人間像を作り出そうと不断の試みを続けてきた、前世紀の中国舞劇の姿を知るには、格好の書物と言えるだろう。

『身体的文化政治学』汪民安／主編、河南大学出版社、2004年、河南、263頁

改革開放政策が本格化した前世紀末以来、欧米の現代思想がダイレクトに摂取されるようになった中国では、関連する書籍の出版も、十数年前には想像もできなかったほど増加している。今回紹介する『身体的文化政治学』の編者汪民安氏は、M・フーコー研究



で博士号を取得し、近年身体論を軸に論壇での活躍が目立つ研究者である。

本書には汪民安氏自身の執筆によるものを含め、計十五本の論文が収められているが、全編に触れる余裕はないので、今回はその片鱗を示すため、巻頭に置かれた長編の論考二本を紹介したい。

楊念群「科学的言説から国家の統制へ－纏足が「美」から「醜」へと転化する史的過程に関する多元的分析」は、纏足すなわち旧社会の醜悪な陋習とする現時の常識を括弧に入れ、実際に纏足をしていた女性たちの声の届かない場所で、衛生観念や民族主義が纏足を美から醜の領域へ追いやっていった歴史のプロセスを分析している。

また朱曉東「婚姻による管理－1930～1950年における中国共産党の婚姻および女性解放法令の戦略と身体」では、建国前の共産党による婚姻関連の法律が、いかに女性の身体を「解放」し、またコントロールしたかを、当時の興味深い資料に基づき論じている。

本書所載の論文は、いずれも「後学」（中国ではポスト～系の学問をこう総称する）の影響の色濃い論考であり、残念ながら舞踊を直接に扱った文章はないものの、中国における身体論の現状を通覧するには、好適なアンソロジーといえるだろう。

台湾

富 燦霞

台湾の舞踊書籍を紹介するにあたり、台湾における舞踊の状況が理解できるよう、1. 歴史、2. 技法、3. 身体の3つの分野を設定し、台湾という地域の特色を把握しやすいと思われるものを核として、以下合計6冊の書籍を紹介したい。

1. 【歴史】

①『臺灣傳統舞蹈』, 李天民・余國芳／著, 175p, 國立臺灣藝術教育館, 台北, 2001年

伝統を焦点に、台湾という地域ではどのような舞踊が継承されてきたか、その概要を紹介することを目的とした書籍である。

本書は、「台湾で傳承されている舞踊の種類とその名称の解釈」、「原住民の舞踊」、「祭祀に因んだ民俗芸能の中の舞踊」、「中国伝来の舞踊」の4部構成になっている。

舞踊の写真は計155枚が掲載されており、台湾における各種伝統舞踊の実際の様子を、写真を通して容易にうかがい知ることができる。

伝統舞踊に関しては、「伝統民俗舞踊」、「中華伝統舞踊」、「台湾伝統舞踊」など、固有名詞の解釈及びその由来が記述されているが、特に台湾の民族舞踊の発展は政治と絡み合う歴史があり、状況説明には一定の困難が伴う。しかし本書の記述から、戦後台湾における伝統舞踊発展の側面を垣間見ることができるだろう。



②『舞蹈欣賞』, 平珩／主編, 張中煖, 吳素芬, 林亞婷, 古名伸, 吳素君, 林明美, 盧健英, 孔和平, 郭曉華, 李婧慧／合著, 303p, 三民書局, 台北, 1995年

1995年当時の台湾の若手舞踊研究者を結集し、それぞれの専門分野に関する文章をまとめた書物である。

人間と舞踊、西洋舞踊、中国舞踊、アジアの舞踊の4部門に大別され、ダンス全般に関するガイドブックの役割を担っている。



第一章「人間と舞踊」は、ダンスとは何か等、ダンスに関わる事柄について述べる導入部である。第二～四章ではバレエ、モダンダンス、ポストモダンダンス等の主な西洋舞踊が紹介され、欧米および世界の舞踊の動向を概観している。第五～八章は中国舞踊の歴史概要、台湾と中国大陸における戦後の舞踊概観に当てられ、第九章はインド、インドネシアと日本の舞踊について言及している。

舞踊入門のガイドブックでありながら、戦後台湾及び中国における舞踊の発展史を網羅し、しかもそれらに初めて言及した著書であり、戦後台湾と中国の舞踊が各々の地域でどのような発展の経路を歩んできたかが理解できるだろう。

2. 【技法】

①『中國舞譜』, 李天民／著, 592p, 國立編譯館, 台北, 1976年

戦後台湾で行なわれている中国舞踊の基本技法解説書である。各技法の名称、解釈、行い方を、絵と文章の組合せによって説明しているのが特徴である。これら基本技法の大部分には、京劇を始め中国伝統演劇の技法が多数取り入れられている。

台湾が中国共産党に対抗するための文芸政策の一環として、「民族舞踊」運動を提唱して以降出版された書物であるが、中国の伝統演劇は口伝が中心であったため、技法の記録はほとんど残されていない。本書は、戦後の中国舞踊、そして中国伝統演劇における技法解説のために記録された、初めての書物であるといつてよい。



②『中國戲曲表演藝術辭典』, 余東漢／編著, 684p, 國家圖書館, 台北, 2001年

現存する中国の伝統演劇の技法及び演出法を網羅した本である。上記『中國舞譜』と同じ方法をとっているが、各技法は文章による説明を中心にし、簡潔な絵でその技法のイメージを提示している。



内容は「役柄」,「部位の技法」,「跳躍や回転の技法」,「宙返りや絨毯の上での技法」,「衣裳の使い方」,「冠りものの使い方」,「付け鬚の技法」,「小道具の使い方」,「武器の技法」,「上下場及び集団配置の方法」,「演出の用語」の全11部分に分けられている。

本書は1980年代末に台湾と中国の交流が回復されて以降,台湾海峡を挟んだ兩岸の伝統演劇研究者が協力して刊行した書物であり,編著は中国出身の役者及び研究者,出版は台湾となっている。

3. 【身体】

①『舞踏評析與身體觀』,呉士宏/著,320p,五南圖書,台北,2001年

Writing the Dancing and Bodily Perspectives, by WU Shih-Hung

台湾で心理学の修士号,ロンドンSurry大学院でパフォーマンスアーツの修士号を取得した作者は,心理学者,舞踏評論家・実践者・研究者,詩人など多数の肩書きを持つ人物である。

本書は台湾の舞踏作品を対象にした彼の数々の批評文,インタビューのほか,他の評論家の批評文,特に彼と反対意見を持つもの5篇を収録し,読者により広い思考空間を提供しているのが特徴である。また,詩人でもある彼は,現代詩の形式で書いた舞踏批評詩を10篇も本書に収めている。

ロンドンで学んだ彼は,様々な哲学や舞踏の理論を引用し,台湾における舞踏,評論や身体に関わる諸議論に対して問題提起をする一方,自身もまた,舞踏評論家と舞踏実践者の両方の立場から独自の視点で論を展開している。1995年以降,台湾の舞踏界でもっとも注目される問題やその背景は,本書を通して直接に看取できるだろう。



②『傾聽身體之歌—舞踏治療的發展與內涵』,李宗芹/著,297p,心靈工坊文化,台北,2001年

Massachusetts Lesley College Expressive Therapy ProgramとMinnesota州立大学の修士号を取得した彼女は,総合病院の精神科におけるDance Movement Therapy(以下DMT)治療師の職務を経て,現在台湾輔仁大学心理学科の副教授,および台北市立療養院DMTの監督を勤めて



いる。

DMTに携わって20余年,絶えず身体を探索し続ける実体験の中で,舞踏と身体・芸術・治療,相互間の異同に関する理解を深めていった。

本書は,DMTの発展と歴史の紹介から始まり,異なる治療法,現在の治療動向,そして臨床治療の実践,運用及び方法にまで言及している。彼女の関わった医療ケースから5例が紹介されており,中には治療を受けた者の書いた文章も掲載されている。本書を通して読者はDMTとは何かを理解するだけでなく,台湾におけるDMTの治療の実態,過程,受診者の状態までうかがい知ることができるだろう。

イタリア

清水 英夫

従来の（日本の）西洋舞踊史研究では、フランスやロシア、ドイツといった国が中心とされ研究も集中しているように見受けられるが、歴史を通じて舞踊はヨーロッパの様々な地域で行われてきたのであり、振付家や舞踊家の活動は国境を越え、各地域の舞踊文化・運動はお互いに影響を与えあってきた（もちろんこれはヨーロッパに限ったことではない）。これからの西洋舞踊史研究においては、こうしたいわば中心国に限られない国や地域の状況にも目を向け、かつ地域主義に埋没してしまうことのない広い視野を持って、従来の舞踊史観を問い直していくことが求められていると言えるだろう。そのような観点から本稿では、16世紀から20世紀までの西洋舞踊史を対象とした研究書のなかから、これまでの文献紹介となるべく重複しないよう意図しつつ、特にイタリアの舞踊にも配慮がなされているものを英語文献を中心に紹介する。

Silvio d'Amico (dir.), *Enciclopedia dello Spettacolo*, 12v., Le Maschere, 1954-1966.

スペクタクル（舞踊だけでなく演劇や映画等も含む）に関するイタリア語の辞典としては、まず本書を参照すべきである。イタリアに限られない世界中の舞台芸術の状況について、また20世紀以前について豊富な記述を含む点でこれを凌駕するものは未だないと言ってよく、大分古くなり20世紀後半以降について記述はないものの、依然として有用である。イタリアの舞踊史については、もちろんPhilippe Le Moal (ed.), *Dictionnaire de la danse*, Larousse, 1999 ; Martha Bremser (ed.), *International Dictionary of Ballet*, 2v., St. James Press, 1993 ; Selma Jeanne Cohen (ed.), *International Encyclopedia of Dance*, 6v., Oxford University Press, 1998 ; Stanley Sadie (ed.), *The New Grove dictionary of music and musicians*, 29v., Macmillan, 2001 等にも参考になる項目・記述が多数ある。

J.R. Mulryne, Helen Watanabe-O'Kelly and Margaret Shewring (ed.), *Europa Triumphans. Court and Civic Festivals in Early Modern Europe*, 2v., Aldershot and Burlington VT: Ashgate, 2004.

16世紀から17世紀の西洋の宮廷及び民間祝祭についての包括的な研究書。ここで祝祭とは、王や

公爵の首都への入場式、王家の結婚式や葬式、宗教的祭事などの総称で、舞踊や身振り、図像表現や音楽等が様々に活用される総合的なスペクタクルであった。本書は従来の研究で手薄だったヨーロッパ（フランス、イタリア、ポーランド・リトアニア、オランダ、プロテスタント同盟、スカンディナヴィア諸国）の諸地域、及びメキシコ、ペルーの祝祭を取り上げ、西洋の祝祭の定義を再考に付する。注釈、英訳の付されたテキスト（festival book）原文と図版を多数掲載している。祝祭文化を同時代の政治的・社会的状況のもとで考察しようとする視点が参考になる。なお、同じ著者群による Pierre Behar and Helen Watanabe-O'Kelly (ed.), *Spectaculum Europaeum : Theatre and spectacle in Europe (1580-1750)*, Wiesbaden : Harrassowitz Verlag, 1999 も参照。

Gregorio Lambranzi (tr. from German by Derra De Moroda), *New and Curious School of Theatrical Dancing. The Classic Illustrated Treatise on Commedia dell'Arte Performance*, Dover Pub. Inc., 2002.

著者は17世紀末から18世紀初頭にかけてヴェネツィアで活躍した舞踊教師であり、本書は当時のコメディア・デッラルテの舞台の様子を多数の図版とともに伝えている。イタリア語原著の出版はフイエの記譜法についての著作の出版と同じ1700年であり、1716年にドイツ語版が、1928年に英語版（ドイツ語からの英訳）が出版された（本書はその再版である）。コメディア・デッラルテの舞台では演技だけでなく様々な舞踊のバが行われていたことがわかる。

なお、バレ・リュスをはじめとする19世紀末から20世紀前半の多様な芸術活動におけるピエロのモチーフについては、Martin Green and John Swan, *The Triumph of Pierrot. The Commedia dell'Arte and the Modern Imagination*, Macmillan, 1986 が、コメディア・デッラルテの演技術とその現在における実践については、John Rudlin, *Commedia dell'Arte. An Actor's Handbook*, Routledge, 1994 ; Barry Grantham, *Playing Commedia. A Training Guide to Commedia Techniques*, Heinemann, 2000 が参考になる。

Bruce Alan Brown, *Gluck and the French Theatre*

in Vienna, Clarendon Press, 1991.

ウィーンにおけるグルックのオペラ改革について、音楽学の立場から詳細な検討がなされているが、そこで舞踊の果たした役割について考察するなかで、(ノヴェールと同様に)バレ・ダクシオンを提唱・実践した舞踊家・振付家ヒルファディング Franz Hilverding (1710-68) や、その生徒でグルックと活動を共にしたアンジョリーニ Gasparo Angiolini (1731-1803) についても、作品に即した詳しい記述がある。オペラと舞踊が相互に影響を与えながら改革を進めていったことが描き出されている。なおアンジョリーニの、1773年のノヴェールへの手紙を含む諸著作は、Carmela Lombardi (ed.), *Il ballo pantomimo: Lettere, saggi e libelli sulla danza (1773-1785)*, Paravia scriptorium, 1998 に収録されている。また、Carl Daugenti, *Neoclassical Theater Dance and the Theoretical Work of Gasparo Angiolini*, Ph.D. diss., UCLA, 1998 には、グルック、アンジョリーニによるバレエ作品《ドン・ジュアン》(1761)、《包囲されたシテール》(1762)、《セミラーミス》(1765)の序文に対するコメントリーがある。

Rebecca Harris-Warrick and Bruce Alan Brown (ed.), *The Grotesque Dancer on the Eighteenth-century Stage. Gennaro Magri and His World*, The University of Wisconsin Press, 2004.

18世紀後半に活躍した舞踊家、舞踊教師マージェリの1778年の著作 (Gennaro Magri (tr. by Mary Skeaping), *Theoretical and practical treatise on dancing*, Dance Books, London, 1988) は、当時の舞踊技術を伝える貴重なドキュメントとなっているが、本書はマージェリのナポリやウィーンでの活動やその技術についての複数の考察を通して、西洋舞踊史のなかにマージェリを正当に位置づけようとする。付録には、マージェリの著作におけるパの整理や、当時のイタリアやパリの3劇場で上演されたバレエの台本も (英訳とともに) 付されている。

マージェリの活動した18世紀には、「シリアス」や「グロテスク」といった様々な舞踊のスタイルがあった。Edmund Fairfax, *The Styles of Eighteenth-century Ballet*, Scarecrow Press, Inc., 2003 は18世紀に興隆した様々な舞踊スタイルについて記述しており、18世紀の劇場舞踊はシンプルで動きも限られていたというような通常の舞踊史の見方を覆してくれる。

なお、プレ・ロマン主義期のバレエについては、依然として Marian Hannah Winter, *The Pre-Romantic Ballet*, Pitman Pub., 1974 は有用である。ゲストの著作 (*The Ballet of the Enlightenment*, Dance

Books, 1996 ; *Ballet under Napoleon*, Dance Books, 2001) がフランス (特にパリ) に考察を集中しているのに対し、ウインターの著作は、17世紀から19世紀に至る、フランスのみならずイギリス、ドイツ、オーストリア、イタリアを含むヨーロッパ各地の状況に目を配っている。

Lynn Garafola (ed.), *Rethinking the Sylph. New Perspectives on the Romantic Ballet*, Wesleyan University Press, 1997.

従来パリを中心にとらえられてきたロマンティック・バレエを、民族性や女性性といった観点、またローマやナポリ、ワルシャワなどヨーロッパの様々な地域で同時代に展開した舞踊の状況からとらえ直そうとしている。なお、本書で舞踊・振付家で舞踊教師としても活躍したカルロ・ブラジス Carlo Blasis (1795-1878) について記述しているポエジオ Giannandrea Poesio には、*The Language of Gesture in Italian Dance from Commedia dell'Arte to Blasis*, Ph.D. diss., University of Surrey, 1993 もある (ここでは身振りについての考察のみで、バレエのパについての考察はない)。ブラジスの代表的な著作としては、Mary Stewart Evans (tr. and ed. by), *An Elementary Treatise upon the Theory and Practice of the Art of Dancing*, Dover Pub., 1968 (1820) ; R. Barton (tr. by), *The Code of Terpsichore*, Dance Horizons, 1976 (1828-30) が挙げられる。

アンジョリーニらと同様、ブラジスもまたロシアに渡って活動し、舞踊文化を伝えた。ブラジスのロシアでの活動については Elizabeth Souritz, *Carlo Blasis in Russia 1861-1864*, Studies in Dance History vol.4, Pennington, N.J., 1993 が詳しい。なお、19世紀ロシアにおけるバレエ台本 (シャルル・デイドロやフィリッポ・タリオーニの作品を含む) については、Roland John Wiley, *A Century of Russian Ballet. Documents and Eyewitness Accounts, 1810-1910*, Oxford University Press, 1990 を参照。

Marc Hertsens, *Classical ballet. A Review of Blasis and Cecchetti's Technique*, Dover Pub., 1999.

ブラジスらによって19世紀にさらに発展・普及を遂げた舞踊技術は、舞踊家・舞踊教師チェケッティ Enrico Cecchetti (1850-1928) へと受けつがれ、それは今日の舞踊教育の基礎ともなっている。本書はバレエの様々なパについて、ブラジスとチェケッティのマニュアルに立ち返りながら、その意図を汲みつつ整理している。なおチェケッティ・メソッドについては、Cyril W. Beaumont and Stanislas Idzikowski, *A Manual of the Theory and Practice of Classical Theatrical Dancing*, Dover

Pub., 1977 (1922) ; Grazioso Cecchetti (ed. by Flavia Pappacena, tr. by Ann Franklin), *Classical Dance. A Complete Manual of the Cecchetti Method*, Gremese Editore, vol.1 (1997), vol.2 (2002) を参照。

Giovanni Lista, *La scène moderne. Encyclopédie mondiale des arts du spectacle dans la seconde moitié du XXe siècle : ballet, danse, happening, opéra, performance, scénographie, théâtre, théâtre d'artiste*, Paris : Carré, 1997.

20世紀以降現代に至るバレエ、舞踊、オペラ、演劇、パフォーマンス、シェノグラフィーといった様々な表現手段について、「身体と即興舞台」「バロックとイメージ」といった21のテーマで整理・考察がなされており、20世紀の西洋の舞台芸術がジャンル横断的な活動であったことが強く印象づけられる。未来派やアヴァン・ギャルドなどイタリアでの諸芸術活動とその影響についても比較的詳しい記述があり、同時代の世界的状況（日本も含む）のなかで評価されている。多数の図版と充実した人名辞典を含む。

Andrée Grau, Stephanie Jordan (ed.), *Europe Dancing. Perspectives on Theatre Dance and Cultural Identity*, Routledge, 2000.

第二次大戦後から20世紀末に至るヨーロッパ各地域（ケース・スタディとして、フランドル、フランス、ドイツ、ハンガリー、イタリア、オランダ、スペイン、スウェーデン、イギリスが選ばれている）の舞踊の歴史及び舞踊研究の現状について、それぞれの国・地域の研究者が執筆している。各国・地域ごとに異なる政治的・社会的状況のなかで、ひとくくりに「ヨーロッパ」としてまとめることのできない文化的アイデンティティの多様さが、舞踊を通して浮かび上がる。

バロック・ダンス

浜中 康子

はじめに

日本においてバロック・ダンスは他の舞踊のジャンルに比べてまだまだ認知されているとは言い難い。そこで今回の文献紹介では、最新研究という視点ではなく、バロック・ダンス研究の必須となる著書をご紹介したいと思う。ただし歴史的な原典資料は除くものとする。

1. 体系的なカタログ

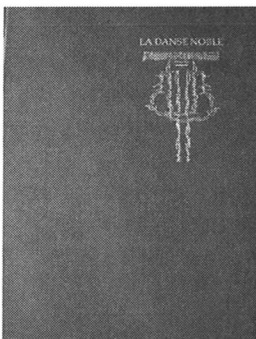
バロック・ダンスとは17世紀の初め頃から18世紀の半ばにかけてフランスの宮廷を中心に栄え、ヨーロッパ中に広まっていった宮廷舞踏の名称であるが、それらのダンスは当時のダンス教師によって記された舞踏譜や、理論書によって、300年以上も時を経た今、復元することができる。舞踏記譜法は一種類ではないが、最も数多く現存する振付はポーシャン=ファイエ・システムによって書かれている。この舞踏譜には、踊り手の進む道筋、ステップ、楽譜、そして全部ではないがその作品を踊ったダンサーの名前が記されている。

さて文献紹介に話を戻すが、前述のポーシャン=ファイエ・システムによって現存する舞踏譜は約350種類あり、そのうち現代書として再出版されたコレクションはきわめて少ない。その膨大な舞踏譜を整理し目録化した以下の著書は、たいへん貴重な研究書と言えよう。

(1) Meredith Ellis Little / Carol G. Marsh, *La Danse Noble-An Inventory Of Dances And Sources*, 173p., Broude Brothers Limited, 1992

振付作品は、各々以下のように整理されている。資料(1)の例に基づいて解説してみよう。

1. カタログ番号,
2. ダンスタイトル (女性のためのアントレ, オペラ「アティス」の中でマドモワゼル・ギヨーによって踊られる),
3. 振付家 (ペクール), 4. 出典 (ペクールの劇場用コレクション1713年頃, 77頁), 5. 作曲者 (リュリ「アティス」プロローグより1676年), 6. 舞曲の種類 (ガヴォット), 7. 踊り手 (女



性ソロ), 8. 曲の冒頭部分

(2) Francine Lancelot, *La Belle Dance-Catalogue Raisonne Fait En L'an 1995*, 405p., Van Dieren Editeur Paris, 1996

本書は大まかに言えば、*La Danse Noble*のフランス語版と言えよう。このようなカタログの制作は、アメリカ、フランスともにほぼ同時期に進められていたようだが、英語版の出版が先行したためフランス語版は冒頭に原典や振付家、舞曲の解説部分をフランス語と英語の両方で掲載するなど、英語版をふまえて情報を多くした形で出版された。いずれにせよ、これらの著書のおかげで舞踏譜に関する検索が格段容易になったことは、特筆に値する。この目録化の作業は、想像を絶するものであり、著者たちに敬意を表するばかりである。



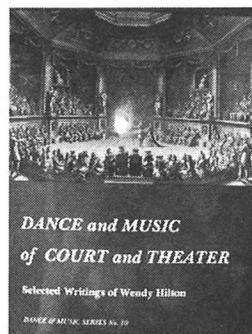
2. 研究書

(1) 概説書

Wendy Hilton, *Dance and Music of Court and Theater* 455p., Pendragon Press, 1997

バロック・ダンスに関して、内容の範囲および研究の信頼性から本書に勝る概説的な研究書は他にないと言っても過言ではないだろう。バロック・ダンスの全容を知ることのできる著書はきわめて少なく、まさにこの本は辞書的な存在と言える。

本書は1981年に出版された *Dance of Court & Theater: The French Noble Style 1690-1725 (Book I)* に100頁にわたる新しい部分 (*Book II*) を併せさせた形で出版された。Book Iの内容は、1. ルイ14世時代の宮廷舞踏-宮廷と劇場に関する概説, 2. フランス貴族スタイルのダンスおよび舞踏譜の分析が主な



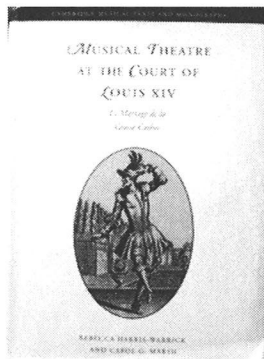
内容で、歴史的背景や原典およびその著者である宮廷のダンス教師について詳細に記されている。また舞踏記譜法に関してもその解説の方法について、またそれぞれのステップをどのように行うのかを、当時の理論書に記されている内容を掲載した上で、著者自身の考えを列記している。さらには各舞曲の音楽の特徴とステップの関連性についても言及している。また原典に基づいて、貴族に必須である礼儀作法、例えばお辞儀の方法や帽子の扱い方、エスコートの方法についてなども紹介している。Book IIの内容は1. 国王のダンスと称されたクラントについて、2. リュリの音楽に振付けられた56曲の振付作品について、3. 振付の名作「Aimable Vainqueur」についてである。

Book Iの舞踏譜の解説法に加えて、ここでは劇場用振付に用いられる技巧的ステップ（ヒルトンはこれをPas de Balletと称している）の記号の解説が示されている。

(2) 総合芸術としてのバロック・ダンス

Rebecca Harris-Warrick / Carol G. Marsh, *Musical Theatre at the Court of Louis XIV-Le Mariage de la Grosse Cathos*, 340p., Cambridge University Press, 1994

バロック時代、宮廷のダンス教師になる資格は、優れた踊り手であること、振付ができること、ヴァイオリンが演奏できること、舞曲の作曲ができることであった。このことから明らかなように、バロック・ダンスと音楽との関わりはきわめて密接であり、当然のことながら音楽学と舞踊史の両面からアプローチする研究が求められている。本書はバロック期のコミカルなオペラLe Mariage de la Grosse Cathos「太ったカトスの結婚」に関する研究書である。二人の著者は、ともに音楽学者であり、バロック・ダンスをW.ヒルトンのもとで学んだ、まさに両分野のスペシャリストである。彼らはフランス国立図書館所蔵のフィリドール・コレクションの中にこの作品の台本を発見した。振付さらには歌い手や演奏者のステージ上での動きに至るまで記された完全な台本としてはバロック期において唯一の舞台作品である。しかしここに掲載された舞踏譜はボーシャン=ファイエ・システムによるものではなく、ファヴィエによって書かれたまったく違うシステムのものであった。著者はデイドロの百科事典に基づいてこのシステムの解説を行い、ボーシャン=ファイエ・システム



との比較研究を行っている。

本書の主な内容は、1. ルイ14世時代の舞台芸術に関する歴史的背景、2. 「太ったカトスの結婚」の台本の具体的内容と解釈（歌い手、踊り手、役者）3. 音楽に関する内容と解釈、4. 舞踏譜の解釈であるが、それとともに全スコアと役者の台詞部分がファクシミリで掲載されている。バロック期の舞台芸術に関する資料は大変少なく、この研究書が与えてくれる手がかりはきわめて重要である。

(3) 音楽と舞踊との関連性

Meredith Little / Natalie Jenne, *Dance and the Music of J.S. Bach* 337p., Indiana University Press, 2001

タイトル通り、バロック時代の最も代表的な作曲家 J.S. バッハの音楽とバロック・ダンスとの関わりに焦点を当てた研究書である。バロック・ダンスは言うまでもなくフランスで確立し発展した。しかしフランスのブルボン王家がハプスブルク家に優位な形で宗教戦争が終結して以降、重要な外交、儀礼はフランス式で行うことが求められ、セレモニーマスターとしてフランスのダンス教師たちがドイツの宮廷にも雇われることとなった。そのような時勢の中に生きたバッハの作品にバロック・ダンスの影響があったことは言うまでもない。本書はバッハを取り巻く舞踏的環境、さまざまな舞曲（メヌエット、ガヴォット他、13種類）における音楽のリズムとステップとの具体的な関係を詳細に記している。本書の初版は1991年に出版されているが、2001年版では具体的に固有の舞曲名がついていないバッハの作品の中にいかに舞踏性があるかということを感じ覚的にではなくリズムに関するチェックリストに基づいて分析している。バッハの舞曲は踊るためのものかという論争を時折耳にするが、作品ひとつずつを音楽と舞踊の両サイドからいねいに見る必要があることを本書は示唆してくれている。



(4) その他

Pendragon pressはDance & Musicというシリーズの中で、バロック・ダンスに関する著書を出版している。参考までにそれらを列記しておく。

No.1 Judith L. Schwartz / Christena L. Schlundt, *French Court Dance and Dance Music, A Guide to Primary Source Writings (1643-1789)* (1987)

No.2 Maurice Esses, Dance and Instrumental Diferencias in Spain During the 17th and Early 18th Centuries (1993) (1994)

No.6 Jennifer Shennan, A Work Book by Kellom Tomlinson: Commonplace Book of an 18th-Century English Dancing Master, A Facsimile Edition (1992)

No.7 David Buch, Dance Music from the Ballets de Cour 1575-1651 (1995)

No.10 Dance and Music of Court and Theater (前述)

おわりに

バロック・ダンスに関する歴史的な原典は、フランスを中心とするヨーロッパに現存するが、現代の研究書としては圧倒的にアメリカで多く出版されているように思われる。バロック・ダンスの世界的権威は、フランスのF.ランスロ、イギリス人であるがアメリカでキャリアを積んだW.ヒルトンと認知されていたが、残念なことに近年二人ともが他界した。バロック・ダンス研究は、復元・公演活動とともに新しい時代を迎えたと言えよう。

資料 1

- 1 4520 2 *Entrée pour une femme*, "Seul dansée par Mlle. Guot a l'opera d'athis" 7 (F)
3 Louis-Guillaume Péroux
4 Source: [c1713]-Péc, Theater Dances, p. 77
5 Jean-Baptiste Lully, *Atys*, Prof. [LWV 53/9] (1676)
6 [Gavotte]

